

総合学習特設単元「合唱祭」について

—A小学校における平成16年度の取り組みを中心として—

川 口 さやか
(本講座研究生)

はじめに

平成10年度に学習指導要領の改訂が行われ、「総合的な学習の時間」が新設された。それに伴い、以前には音楽科の授業での取り組みを中心に行われてきた「合唱祭」が、より広がりをもった活動として行うことができるようになった。また、A小学校の歴史をさかのぼると、A小学校では、昭和49年から、昭和62年まで、「総合学習」が体系的に行われていたことが明らかになった。この14年間に第1期から、第4期に分け、その第4期で、「ステージ発表会」が行われていた。このステージ発表会は、現在の「合唱祭」との類似点が多い。まず「ステージ発表会」について述べ、次に「合唱祭」の行われた背景と内容を概観し、平成16年度の「合唱祭」の実践を述べる。

I. 「ステージ発表会」について

(1) 成立の背景

A小学校では、文化的活動として「総合学習」が位置づけられた。学校教育の中で、子ども達が文化に貢献していくような人間に育っていくためには、子ども文化をどのように位置づけるのかという視点から、文化的活動のできる場がつけられた。また今を意欲的・主体的に生き、人間生活を豊かにし、高めていく場として設定された。「総合学習」第2期までは、上学年集団と下学年集団を基本形態として行われたが、第3期より、上学年集団と下学年集団(A)、低学年、中学年、高学年集団(B)、各学年集団(C)、全学年集団(D)の4集団が設定された。

総合学習は、第1期(昭和49～昭和50)、第2期(昭和51～昭和52)、第3期(昭和53～昭和54)、第4期(昭和55～昭和62)に分けられた。音楽に関連する単元の例をあげると、昭和49年度は「合唱をきこう」「管弦楽をきこう」、昭和51年度は「管弦楽(合唱)をきこう」、昭和53年度は「文化祭」、昭和62年度は「ステージ発表会」であった。「ステージ発表会」は第4期半ばに、昭和57年に赴任してこられたA先生が始められたことであった。昭和57年第1回ステージ発表会が行われ、昭和63年まで毎年、計7回毎年2月下旬から3月初旬にかけての時期に、1年間の活動のまとめとして行われた。異年齢集団の希望者による音楽の発表の場は存在したが、各学級単位で取り組む発表の場がなく、その必要性から「ステージ発表会」が成立した。

(2) 概要と取り組み

各学級の出し物として、合唱を2曲と合奏を2曲、そして上学年全体合唱が行われた。ほとんどの学級が二部合唱を行った。パート決めに関しては、子どもの希望が重視されたが、全くの自由ではなく両パートがしっかり読譜できた後に行われたため、パートの人数はクラスごとにばらつきがあった。演奏は思い出としてレコードに録音され、1人1人に手渡された。合唱の練習は、初めの譜読みを授業の中で2時間ほど行い、その後は学級で仕上げられた。合奏の練習は、各学級の音楽の時間に行われ、担任も一緒に合奏の練習を行った。

(3) プログラムに見られる特徴

第1回「ステージ発表会」は3部構成であった。子ども達によって、プログラムに各学級の曲目の紹介文が記され、ポピュラー音楽も積極的に取り入れられていることが分かる。合奏の指揮者は学級担任が行っている。また6学年では、合唱の部で笛の2重奏が加わることもあった。第3回「ステージ発表会」では、A先生が作曲した作品3曲が保護者のコーラスグループによって第2部の最初に演奏されている。こ

の年は2部構成であった。構成や選曲を年ごとに工夫し、よりよい音楽表現の探求がなされていたことがうかがえる。

II. 「合唱祭」

(1) 成立の背景

総合学習第4期終了後、翌昭和63年に「ステージ発表会」が行われた。しかしその後、平成元年から平成4年度までは、「ステージ発表会」は中断されることとなる。指導に携わったA先生の退任も大きな影響を与えたと考えられる。平成5年、A小学校にB先生が赴任してこられ、同時に「合唱祭」が毎年11月に行われることとなった。平成5年、平成6年と、小学校の講堂で行われた。平成7年、A小学校は第90回式典を行い、その年に初めて、中学校・高等学校の講堂を使用しての「合唱祭」が行われた。小学校の講堂は、体育館としての機能を兼ねている。中学校・高等学校の講堂は、固定の椅子席を有しているため、建物の構造も小学校のものとはかなり異なっている。木造で響きがよく、2階席があり広々とした空間を有している。また、この建物は戦前から建っており、被爆した建物でもある。重厚な柱やライオンをかたどった装飾、電灯など、歴史を感じさせるものばかりである。「合唱祭」を中学校・高等学校の講堂で行った後、B先生は是非とも毎年ここで「合唱祭」を行いたいと考え、その後中学校・高等学校の講堂で行われることとなった。この様式が現在まで続いている。「合唱祭」は平成16年度まで毎年継続して行われ、平成17年度も「合唱祭」が予定されている。B先生自身も、中学校・高等学校講堂で行った時に受けた印象がかなり強いものであったと語っているが、子ども達一人一人も、普段出入りするのしない特別な場所での、様々な方への発表ということで、「合唱祭」を特別な日として迎えているようである。

(2) 「合唱祭」の概要

- ①下学年の部、上学年の部の2部構成で行い、それぞれ1時間程度行う。
- ②主なプログラムは、全体合唱Ⅰ、クラス毎による合唱の発表（歌の発表の前に、クラスアピールをする）、全体合唱Ⅱ（小学生による全体合唱の他に、隣接する中学校・高等学校の合唱班や、A小学校の保護者のコーラスグループによる特別参加の演奏）、である。
- ③司会進行は、3年生児童2名（下学年の部）、児童会運営委員の児童（上学年の部）が行う。
- ④本格的な取り組みはおよそ1ヵ月半である。選曲と伴奏者の決定は、夏休み前に行われる。
- ⑤総合学習特設単元として年間計画に位置づけられ、同日に行われる「文化祭」とともに全校をあげて実施される。
- ⑥保護者が参観することもできる。会場は、A小学校に隣接する中学校・高等学校の講堂である。

(3) 平成16年度のプログラム（クラス発表）

下学年の部

全体合唱Ⅰ「せかいじゅうの子どもたちが」 作詞／新沢 としひこ 作曲／中川 ひろたか
自由曲（自由曲はクラスごとに選曲された）
全体合唱Ⅱ「地球はみんなのものなんだ」 作詞／山川 啓介 作曲／いずみ たく
編曲／早川 史郎

上学年の部

全体合唱Ⅰ「語り合おう」 作詞／劇団四季文芸部 作曲／鈴木 邦彦
編曲／宮澤 裕 編曲／河邊 昭子
課題曲「歌よ ありがとう」 作詞／花岡 恵 作曲／橋本 祥路
自由曲（自由曲はクラスごとに選曲された）
全体合唱Ⅱ「仲間」 作詞／高橋 祐貴 作曲／河邊 昭子
(2部6年)

自由曲

1部1年	「だれにだっておたんじょうび」	作詞／織田 ゆり子	作曲／上柴 はじめ
2部1年	「勇気100%」	作詞／松井 五郎	作曲／馬飼野 康二
1部2年	「LET'SGO! いいことあるさ」	作詞・作曲／H.Belolo,J.Morali,and V.Willis 日本語詞／タケカワ ユキヒデ 編曲／松崎 順司	
2部2年	「わたしの時計」	作詞／新沢 としひこ	作曲／中川 ひろたか
1部3年	「未知という名の船に乗り」	作詞／阿久 悠 編曲／若松 正司	作曲／小林 亜星
2部3年	「Smile Again」	作詞・作曲／中山 真理	
1部4年	「気球に乗ってどこまでも」	作詞／東 龍男	作曲／平吉 毅州
2部4年	「鳥になる」	作詞・作曲／谷村 新司	編曲／鎌田 典三郎
1部5年	「アメリカン・フィーリング」	作詞／竜 真知子 編曲／河邊 昭子	作曲／小田 裕一郎
2部5年	「With You Smile」	作詞／水本 誠・英美 編曲／宮澤 裕	作曲／水本 誠
1部6年	「流れ行く雲を見つめて」	作詞・作曲／松井 孝夫	
2部6年	「ひろい世界へ」	作詞／高木 あきこ	作曲／橋本 祥路

Ⅲ. 平成16年度の全体的取り組み

(1) ねらい

平成16年度のねらいは、「合唱への取り組みを通して、音楽表現を探究する」であった。これは、①合唱祭の取り組みに、積極的に参加することができるようにする〈自主〉、②学級の友達と協力して、合唱をつくりあげる喜びを体験させ、達成感を味わわせる〈協同〉、③よりよい音楽表現をめざすための練習を通して、歌唱表現および合唱表現に必要な技能を身につけさせ、自他の学級および全体合唱の鑑賞を通して、合唱表現のよさや美しさを感じることができるようにする〈探究〉などを通してなされるものであった。

(2) 選曲

選曲上の留意点は、上学年では課題曲を設けることであった。学級の個性や学年の発達段階による合唱の表現の違いを味わいながら、合唱表現について学ぶことができる。下学年では音楽のもつメッセージ性を感じることができるようにするためのテーマを設定し、学級の合唱や全体合唱にそのテーマを反映させることであった。

(3) 練習

- ・音楽科の授業で7月から取り組みを開始する。練習時間を確保し、長期にわたって取り組むことにより、質の高い合唱表現をめざす。
- ・各学級に練習用テープを配布する。必要があれば、朝の会・帰りの会などの際、音楽科担当者が歌唱指導に出向く。
- ・総合学習の時間に、下学年、上学年とも2回全体練習を行う。

以上3点が、実施計画の提案（6月下旬）段階から各教員へ提示された。検討事項として、司会者の立ち位置の確認などを行うのであれば、学年・児童会の司会進行の練習時間を設定することがあげられ、提案事項として、全体合唱のオリジナル曲をつくることがあげられた。歌詞は、テーマを決めて6年生児童有志から自由に募集し、その歌詞への作曲は音楽科が行った。このようにして完成したものが全体合唱Ⅱ「仲間」である。¹⁾

(4) 実施

上学年では、2部合唱や3部合唱を中心に行った。下学年の全体合唱Ⅱの演奏では、形態は2部合唱に近いものであるが、最初からパートを固定してはいない。2つのパートのどちらでも、自信をもって歌えるように直前まで練習を行ったことによって、1、2、3学年合同の演奏は、大変充実したものになったように思う。上学年の全体合唱Ⅰ、Ⅱの演奏形態は、2部合唱であった。課題曲の演奏形態は、4年生が斉唱、5年生が2部合唱、6年生が3部合唱であった。発達段階を考慮し、学年の歌声の特徴がより反映されたと考える。また本年度は、6年生から歌詞を募集し、その詩に作曲を加えた作品を全員で合唱するという、新たな試みも行った。詩を募集する段階から「合唱祭」への子ども達の関心は高まり、全体合唱の練習の日程を尋ねてくる子どもや、第4、第5学年では、来年もこのようなオリジナル曲を作るのかといった声も聞かれた。また上学年全体合唱Ⅱの指揮者は、作詞を行った子どもが行った。オリジナル曲には、6年間の小学校生活で感じたことや思い出、残り少ない小学校生活に対する思い、これからの新しい生活のことなど、様々なことが現れている。子ども達の内面にあるものが表現され、さらに同じ学校で生活してきた仲間が作りあげた歌詞を歌唱することは、大変貴重な体験だと思われる。この時に使用された歌詞は、ほぼ元の形のまま全体合唱曲の歌詞となった。従って、子どもの表現したい内容が可能な限り変化することなく直接伝えられた曲であるといえよう。

(5) 指揮者

A小学校の合唱祭においては、平成15年度は、1年生から6年生までのすべての演奏で、子どもが指揮者を務め、合唱祭に取り組んでいた。しかし、特設単元委員会の中では、クラス全員で学級の友だちと声を合わせて歌う達成感を味わわせたいという目的から、子どもが指揮者を務めるのは3年生からがよいのではないか、との意見が出された。だが現在の2年生は昨学年の部において、指揮者を子どもが務め、指揮をする上級生の姿を見ている。従って子どもの中には、今年こそは指揮者をやってみたい、指揮者になったらどのように指揮をしようか…などと考えている子どももいるであろう。3年生以上が指揮をすると決定すると、子どもの気持ちを無視することになるのではないかと意見が出され、今年は2年生以上が指揮者を子どもが務めることとなった。指揮者の決定にあたっては、希望している者全員に指揮を行ってもらい、その上で、クラスの全員で決定するようにした。その際も各クラスとも、合唱祭への関心が大変高まり、指揮者が決定するとクラス全員で、拍手がおこり、「頑張ってるね。」「こんな風にした方がいいかもしれないよ。」などと、様々な声が聞かれた。2年生の指揮者を選出する場合には、指揮者を決める際の観点が曖昧になりやすいことを考え、指揮をするときに大切なことを皆で確認した。リズムが一定であること、姿勢に気をつけること、強弱などの表現が分かり易いこと、などの意見が出された。

(6) 伴奏者

伴奏については、上学年の部におけるクラスの発表では児童が行っている。練習時間の確保を考慮して、伴奏者を夏休み前に決定したことは大変よかったと考える。筆者は、皆の前で弾くことや、合唱と合わせる時間も多い方がよいと考えていたため、9月から積極的に子どもに伴奏を行わせていた。時には教師の範奏を示すことも行い、徐々に伴奏が変化する子どももいれば、自分なりに楽曲のイメージを膨らませて演奏している子どもや、合唱とよく合わせて弾いている子ども、音色にこだわって弾く子ども…と演奏方法は実に様々であった。合唱をしている皆と伴奏者に隔たりがないことに注意をした。折にふれて、伴奏者にも意見を求めたりすることも行った。また、本番で合唱をする皆が暗譜で演奏をするので、伴奏も暗譜で演奏しなければと考えている子どもがいるように感じた。従って伴奏者には、本番でも楽譜を見て演奏してもよいことを伝え、前日にも楽譜を忘れないことをもう一度確認した。昨年伴奏で思ったような演奏ができず、悔しい思いをしたと聞いていた子どもも練習を重ね、本番でも自分の思った演奏が

1) 平成16年度合唱祭
 上学年の部 全体合唱曲

仲 間

作詞：高橋 祐美
 作曲：河邊 昭子

To Coda ◊

だけのおもいでを

うれ

D.S.

◊ Coda

を ぼくら だけのおもいでを

く かんじてたのにー ー はじ

ん ーたてーきーもー

さ あ

めようー ぼくらは おなじーな かまだ さ

あ つくりだ そ う ぼくら

でき、満足そうな様子であった。

(7) 教育機器

合唱祭で歌唱する曲は、全て音楽科の授業の中で練習を行った。特に上学年では、課題曲、自由曲に加えて全体合唱曲も2曲練習したため、いかに歌いこんでいく中で学ぶかということが重要であったと思われる。その際役立った機器は、電子ピアノであった。全体合唱曲の主旋律や、伴奏、全てのパートを演奏するプログラムを入れたフロッピーディスクを挿入し、それを活用して練習を行った。ボタン1つで操作が行える。2部合唱のデモ演奏を行う、伴奏を再生させそこに子ども達の合唱を加えるなどして、特に11月に入ってからの歌唱練習に役立った。また6年生による全体合唱の模範唱の入ったカセットテープを聴いての学習も、有意義なものとなった。これによって下級生の楽曲に対するイメージが広がり、曲の雰囲気をつかんで歌唱することができたと考える。また、過去の合唱祭のビデオを鑑賞することは、大変意義あるものであった。筆者は、大体において楽曲をどのように表現するのかがまとまりかけた頃に、そのクラスと同じ曲を自由曲とした過去に在籍した子ども達の演奏を、必要に応じて見せた。その結果、テンポや演奏形態の違い、身体表現の取り入れ方の違い、指揮の方法、伴奏の演奏の仕方などを捉えることができ、自分達の演奏についても再考するきっかけとなったように思う。特に、ステージで歌唱するということについての意識が高まったと考える。

(8) 全体練習

3学年合同による、全体合唱はI、IIの練習は、実施計画では2回となっていたが、実際には上学年、下学年とも1回ずつ行った。普段は音楽室におけるクラス単位の練習が主であることに対し、異なった場所で、異なった集団で合唱をすることとなる。生活科などで、異年齢集団で活動を行うことがあるが、約240人全ての子ども達が関わって1つのものをつくり上げることはあまりなく、この全体練習では様々な学びがあった。練習では歌声だけではなく、姿勢や目線、響きなども関わってくるが、それらの学びが下級生にとっては上級生の手本があるだけ理解し易く、上級生はどのように自分達や下級生が演奏をしているのかを客観的に捉え、言葉に表すなどして大変充実していたと考える。

(9) 本番まじかの練習

壇の設置に関しては、記憶が曖昧になりやすかったため、明確にしておく必要があった。壇は、客席から見える部分のみではなく、ステージの奥のほうにも組まれていたため、子ども達が転倒する危険を最小限にとどめることができたと思われる。ステージ練習の前に、本番と同じ環境に整えることも重要であるため、指揮台の位置、ピアノの位置、危険な場所の確認を徹底して行った。指揮台は、写真撮影の関係により、下学年の部と上学年の部との間に少々動かす必要があった。

本番約1週間前から、各クラスのステージ練習を行った。これは音楽科の授業の中で行った。「合唱祭」は毎年行っている行事ではあるが、立ち位置や、入場、退場の仕方など、確認することが多い。演奏やクラス紹介の練習時間をなるべく確保できるように、各クラスが授業開始前までにどこに整列しておき、終了後はどのように教室へ戻るのかを明確にしたプリントが配布され、ステージ練習が行われた。子ども達は、「後ろから風が来た。(3年生)」と話すなど、ステージの前方へだけでなく、天井や横の空間など、様々な空間を意識した練習も行うことができた。必要な際は、担任がVTRに記録し、その後の指導に生かされた。

本番前日、クラス紹介の練習のために設定された、学年ごとのステージでの練習時間があった。これが偶然にも、大変よい結果を生んだと筆者は考えている。自由曲は特に、その学級の雰囲気に合わせて選曲されており、合唱祭の日まで、大切に歌われてきた楽曲である。しかし本番まで、他のクラスの演奏をまじかに見る機会は、ほとんど皆無であった。それがこの時間に実現する学年があった。各学年30分程度で設定されており、クラス紹介練習のみで終了する学年もあったが、下学年は、合唱も含めて練習を行った。上学年でも、互いの演奏を聴き合い、楽曲への理解を深めていたように思う。下学年では指揮者が混乱し、客席側をむいて指揮を始めようとする、歌詞を間違える、などが見られた。しかしここでの経験があったからこそ、当日に混乱がなかったと思われる。

IV. 各学年の取り組みと今後の課題

平成15年度の合唱祭上学年でのB先生の言葉の中には、「お腹を使って歌うこと、言葉を明確に歌うこと、音の高さを正確にコントロールすることを目標に取り組んできて、満足のいくものになったと思います。合唱では言葉を伝えることも大事で、音楽にはメッセージや意味があり表情がありますが、強いてあげればそれを伝えることが今回は満足にできませんでした。来年気をつけましょう。」とあった。筆者は、この点も心に留めて指導を行った。

(1) 2学年

2年生は、昨年度に引き続き、2度目の合唱祭であった。発声の面では、もう1つというところもあったが、工夫を考え、皆でよく合わせることなどに注意し、各クラスとも、朝の会や帰りの会でも進んで練習を行い、合唱祭ではそれが活かされたようである。造形の時間に作成した、ぶんぶんゴマを各自ステージまで持参してまわし、体操選手の模倣を扱った紹介を行って、クラスの元気のよさを紹介した後、合唱を行う。楽曲にてでくる、「コチキン、カッチン、コトピン」という表現をもとに紹介を行う。このように合唱をする前の心をつなぐことも重視して発表がなされており、大変まとまった歌唱ができていたように思う。

(2) 3学年

3年生は、下学年での発表は本年度で最後となる。1、2年生の手本となった、大変豊かな音色をもった演奏であった。他学年に与えた影響も大きかったと考える。9月当初より、音楽作りに対して意欲的に取り組み、言葉をはっきりと伝えることや、音の高さ、フレーズの間隔など、様々なことで意見を出し合い、皆で演奏をつくり上げていくことができた。またクラスの紹介は、劇のような仕上げ方をする、自由曲のハミングを行い、それをBGMとして使用する、などのようにより工夫をこらした発表を行うことができた。歌唱は厚みのある歌声になっていたように思う。

(3) 4学年

4年生は、学校行事の関係で、合唱祭前に1週間音楽の授業がないというクラスもあった。しかし昨年までの経験を生かし、さらに今年から上学年の部での発表ということで、どのようにしたら合唱でよりよい表現ができるのか、また何を伝えたいのかを明確にした発表であったように思う。普段の朝の会、帰りの会での練習も行い、パート別に練習を行って各パートの音を確認する、校庭の方を向いて練習し、校庭の木々の葉を揺らすように歌おうなどと、両クラスとも、日々何か目標を立てて取り組んでいたように思う。合唱祭本番前に、特に変化が見られたように思う。頭声的発声を意識し、音のもつ楽しさや、美しさを大切に、歌唱することができていたと考える。

(4) 5学年

5年生は、4年生と同様、課題曲、自由曲に関しては、夏休み以前に楽譜が渡してあったため、前期に何度か歌唱していた曲もあった。皆で大切に楽曲を歌い、深めていくことができた。9月当初より、各クラスに与えられた自由曲に対する特別な思いが特に伝わってくる学年であった。リズムや音程などが難しい曲も選曲されていたが、最終的にはよく解釈したうえで歌唱を行っていたように思う。遠くへの響きを注意していること、歌うことが好きなこと、さらに気もちよく歌っていることが分かる演奏であった。歌をつくり上げる際も、友だちのことを考えた思いやりのある発言が多く、自ら学んでいく姿勢も多く見受けられた。

(6) 今後の課題

合唱祭後のふり返りの授業で、自分のクラスの演奏を聞いての気づきを発表してもらったところ、4年生では、「気球に乗ってどこまでもは、本当に気球にのってどこまでも行っているような感じがしました。」「ひびきがまとまっていた。」などの意見があった。また、ソプラノのパートの声がアルトよりも強いことを指摘する意見も多かった。高音と中音域での声の出し方の変化に気づき、その変換がうまくいっていないことを挙げる子どももいたため、次回の課題となろう。

2年生、3年生では、練習を行う際の並び方を少し変化させると、歌声が変化し、子ども達も新鮮に感じていたが、大きく変化させると混乱するように思えた。筆者は、下学年の練習の際には並び方の工夫よりも、リズムに焦点をあて、リズムパターンを図に表し黒板に貼る、などの手立てによる学習の方が有効であると考えた。上学年は、パートでの練習を自主的な活動主体とし、評価カードなどの活用を積極的に行うことや、歌詞をさらに深く学ぶ場を作ることの必要性を感じた。5年生では、歌詞に英語も含まれ、授業で学習しているであろうと予想していたが、意味を確認すると、Withの意味が曖昧であったり、Feelの意味が分からなかったりした。従って提示もさらに踏み込んだものにする必要がある。筆者は以前の経験で、本番の前日の緊張感が本番に関わってくることを感じたことがあるため、前日に色画用紙に、学級ごとに小さな手紙のようなものを短く書いて配布した。各学級がもつ課題が異なることもあり、同じ内容とは限らなかった。教師の側から見ての気付きを示し、本番を楽しみにしているということ伝えた。これは本番当日ステージに上がる際に「頑張るからね。」と言ってステージに上がる子ども達の姿から、一定の成果があったと判断するが、これを新聞形式にするなどして、授業の合間に紹介し、子ども達の意見ももっと反映させるとさらによいものとなるのではないかと考える。

おわりに

本年度の合唱祭において、演奏はもちろんのこと、クラス紹介でも丁寧につくり上げられた小道具を使用するクラスや、群読形式をとることによって、発声方法は異なるものの声が出し易くなり、次の合唱へとスムーズに移行するクラスもあった。クラスの紹介と合唱が1つになった時が初めてそのクラスの発表が出来上がった瞬間に感じられた。下学年では、時間にすればほんの数分の曲ではあるが、長期にわたって各クラス本当によく取り組んでいた。声が変わっていく様子や、楽曲への理解が深まる様子は、本番の演奏だけでは分かりえないことであった。

A小学校では、音楽科教育において、歌唱という大きな柱が存在し、そこに合唱が含まれ、教育がなされていることが分かった。12年間実施されてきた「合唱祭」も、形態は異なるにしても、過去の「ステージ発表会」と重なる部分は多く、伝統が受け継がれていると筆者は考える。「合唱祭」は、「歌いたい」「あんな風になりたい」と自然に思いを抱き、音楽のもつ美しさやハーモニーに親しみ、さらなる表現をめざし意欲的に取り組む子どもの姿を生み出す。これは継続的に「合唱祭」が行われ、そこに全校をあげての取り組みがあるために起こりうるものである。1年生が3年生を見て目標をもつこともあれば、ふり返りの授業では5年生が1年生の演奏を味わうこともある。同学年の演奏した曲に興味をもつクラスもあれば、「あのクラスとあのクラスは、曲の感じが似ている。」といった楽曲の種類に関する内容も聞かれた。また、「あの曲は歌ったことあるよ。歌いたい。」と言って1年ぶりに歌ったクラスもあった。より多くの楽曲を知ること、これも豊かな音楽表現には欠かせず、解釈の違いを感じたり、1年経ってからの楽曲に対する解釈の変化なども理解することができた。このように大変広がりをもった活動となった。また、「合唱祭」で歌唱した楽曲は当日で終わりではなく、転校した友だちのために再度演奏したものが録音され、送られたクラスや、中越地震での被災者の方々への心の支えとなることもできるという音楽のもつ役割について指導されたクラスもあった。約4か月後の卒業式では、1年生は初めてまぢかで6年生の歌声を聴き、そこでさらに歌を深く味わい、歌声について思いをめぐらせることになる。

筆者は、A小学校の長い音楽科教育の中の歴史の中の、ほんの短い期間ではあったが、その一部に携わることができ、様々な事を学ばせていただいた。その中で、改善の必要なことも数多くあり、多くの先生方の助言と助力を得ながら無事に合唱祭を終えることができた。そして1番の支えは、生き生きと歌う子ども達の姿であった。短期間では理解し得なかったことや考察の不十分な点もあるかと思うが、これらの経験を生かしさらに研究していきたいと考えている。

参考・引用文献

- ・広島大学附属小学校 学校教育研究会編 研究紀要 19 自己学習能力を育てる 教育課程 '91 1991
- ・広島大学附属小学校 学校教育研究会編 学校教育 (第790号) 自己実現をめざす学習主体の育成 (2) 1983
- ・広島大学附属小学校 学校教育研究会編 学校教育 (第801号) 学習主体を育てる教育の創造 (1) 1984

- ・広島大学附属小学校 学校教育研究会編 学校教育（第802号）学習主体を育てる教育の創造（2）
1984
- ・広島大学附属小学校 学校教育研究会編 学校教育（第815号）学習主体を育てる教育の創造（3）
1985
- ・広島大学附属小学校 学校教育研究会編 学校教育（第823号）学習主体を育てる教育の創造（11）
1986
- ・広島大学附属小学校 学校教育研究会編 学校教育（第862号）自ら学び、高めあう学習主体の育成
1989
- ・広島大学附属小学校 学校教育研究会編 学校教育（第1048号）特集 今求められる音楽科の授業づくり
2004
- ・小原光一著『音楽 豊かな心を育てる音楽指導』小学館 1986
- ・稲垣忠彦他編『授業③音楽 リズム表現と合唱』岩波書店 1992
- ・高浦勝義著『総合学習の理論・実践・評価』黎明書房 1999
- ・高浦勝義監修『子どもが創る総合学習』黎明書房 1999
- ・高階玲治著『総合的学習の学力をどう育てるか』明治図書 2001

資料

- ・総合学習 特設単元 「文化祭をしよう」プログラム 広島大学附属小学校 1984
- ・「合唱祭」VTR 広島大学附属小学校 1994、1995、1996、1997、1998、1999、2000、2001、2002、
2003